

---

# 魔法少女リリカルなのは～七色の戦士たち～

フィレス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは七色の戦士たち

### 【Nコード】

N40690

### 【作者名】

ファイルス

### 【あらすじ】

とある管理外世界で平和に暮らしていた一人の少女。しかし、不思議な夢を見た時から少女の人生は大きく変わってしまう。

そんな時、少女の前に突如現れた正体不明の大部隊と6人の騎士。少女は大好きな世界を守るため6人の騎士と共に戦争の日々を送っていく。

魔法少女リリカルなのは七色の戦士たち 第1章「少女の愛した世界」始まります。

## 第1章 夢の始まり（前書き）

はじめまして、作者のフィレスです

この作品が初めての投稿で読みづらいと思いますが

精一杯がんばって書いていきますのでよろしく願います。

あと、第1章はほとんどのはは関係なくシャルスの祖国編です。

## 第1章 夢の始まり

蒼く澄み渡る空

静かに揺れる草木

何事もなく平和な世界「第27管理外世界レイントール」  
そこで日々平穏な生活を過ごす少女がいた…

プロローグ「夢の始まり」

??? side

私はシャルスタ「レインス」ファルン

学校のみんなからはシャルスって呼ばれています  
どこにでもいる普通の小学3年生だったのですが…

…ここは、どこ？

気がついたら七色に変化していく空間に私一人だけ…

夢の中かな？ひとまず…

シャルス「いたたっ！」

夢じゃない…

たしか部屋で寝てたはずなんだけど…

???（この声が聞こえますか？）

ふと声が聞こえたと思ったら…

シャルス「ふえ！？だ、誰！？」

私の前にショートヘアできれいな緑色の髪と眼の女の人が見れました  
いきなりなのでビックリしちゃった…

…なんだかお母さんみたいな雰囲気の人だなあ

？？？（すみません…驚かせてしまいましたか）

シャルス「ここはどこ？あなたは誰なの？」

ヴィルシス（私の名はヴィルシス、この空間は虹色の書の中です）

シャルス「ヴィルシス…ね、って…ここは本の中ってことなの？」

ヴィルシス（はい…時間がありませんので手短に言いますが

明日、レイントールに戦争が起きます。

ですが、決してその場を離れないでください）

シャルス「戦争！？どういうことなの？教えてヴィルシス！街は…  
みんなは大丈夫なの！？」

ヴィルシス（大丈夫です。必ず被害は出しません、なので安心して  
ください

ですが、必ずその場を離れないこと。わかりましたか  
？）

シャルス「は、はい！わかりました」

ヴィルシス（元気な子ね、それではまた明日会いましょう…転送）

ピカッ

シャルス「ふえ！？何これ？」

ヴィルシス（大丈夫よ、元の世界に返すだけですから）

ピカアアア パシユッ

ヴィルシス（ひとまずこれで主の方はいいわね…）

ピッ ピピッ

音と共に現れたモニターには戦争の様子が映っていて、その下には

『明日11：30頃 レイントール中心街にて』  
と書かれていた…

ピッ

確認をするとモニターを閉じ…

ヴィルシス（何としてもこの街は守らないといけないわね…主のためにも絶対に）

と言うと、どこかへと行ってしまった

## 第1章 夢の始まり（後書き）

初めてでしたがどうでしたか？読みづらくなかったでしょうか？  
感想・批評等をたくさん待ってます。

また、次回から本文のキャラもあとがきに出していく予定です

### 次回予告

「夢から目が覚めて…」

「平和な一日が訪れようとしていた」

「しかし、それは単なる嵐の前の静けさだった」

「誰もいない家に現れる6人」

「そして刻一刻と迫る戦争までのタイムリミット…」

「シャルスの知らない間に物語は進んでいく」

第1話「七色の部隊」

## 第1章 第1話「七色の部隊」(前書き)

第1話投稿です。この話で物語が進む予定でしたが作者に文才が全くないわけで

たいして物語の進まない1話になってしまいました。

なんとか頑張っていきますので、よろしくお願いします

それでは本編をお楽しみください  
あまり、面白くないでしょうが…

## 第1章 第1話「七色の部隊」

ヴィルシス side

7:05

主は今日もぐっすり寝てますね…

♪♪ ピッ

シャルス「んみゅ？…あと5分…」

7:30

早く起きたほうがいいんじゃないでしょうか…？

…♪♪ ピッ

シャルス「ふわぁぁ…まだ眠いからあと5分」

仕方がありませんね…よいしょと

シャルス「…うわぁぁ！？体が勝手に！」

ドカッ

シャルス「いたた…なんで？…ってもうこんな時間！？早くしなくちゃ」

シャルス「でも…昨日の夢は何だっ たんだろ？」

妙にリアルな夢だったけど戦争なんて…」

ガチャ タタタッ

ヴィルシス「やっと学校へ向かいましたか…ヴァルスタレインズ出てきて」

そう言つと…

少女A「ふう… やつと外に出られたわね」

紅いツインテールの髪と紅い眼のシャルスと  
たいして年の離れていないように見える少女が現れ…

少女B「あの中狭いからね」

紫色のポニーテールと紫色の眼のまたシャルスと  
年が離れていないように見える少女が現れ…

青年A「ファルクス・スーフエン。静かにしろ」

黄色の短髪と黄色の眼の20代に見える男性が現れ…

ファルクス「分かりました」

スーフエン「はい」

少女C「…ヴィル、今の状況は？」

オレンジ色の肩まで伸びる縦ロールの髪にオレンジ色の眼のシャルスより

2、3歳年上に見える少女が現れ…

ヴィルシス「ちょっとまってエンジェス、広域探査をかけるわ」

キィィィン…

ヴィルシス「来たわ、方位160距離3800速度1700…奴らよ」

青年A「早いな…俺が先に行こう」

ヴィルシス「ええ…それが最良の策ね、

ライジェラルは早急に主の元へ行き安全を確保」

ライジェラル「わかった、では先に行くでしょう

ヴァルスタレイنز飛将ライジェラル…いざ参る！」

そう言うとならライジェラルの足元に星を円で囲んだ黄色の魔法陣が現れ、ライジェラルの背中に黄色の羽がつき空高く飛んで行った

少女D「ふわあああ…何かあったの？」

…とさっきまで寝ていたように思える声で

藍色のうなじがぎりぎり見えないほどのショートヘアに藍色の眼のシャルスよりも2、3歳年下に見える少女が入ってきた

ヴィルシス「…もっと早く起きられないのですか？セレンフィース」

エンジェス「…遅い」

セレンフィース「無理だよ」布団の中気持ちいいもん」

ヴィルシス「ハア…そうですね…」

スーフェン「おゝいセレンゝ!!」

セレン「あれえ？スーフェンじゃん…そういえばみんな早いね」

ファルクス「あんたが遅いのよっ！もう11時じゃない…」

ヴィルシス「お話しはここまで、今はライジェラスが上手くやってくれてるけど

一人じゃ救出が遅れるのでスーフェン・ファルクスの二人はライジェラスの援護。セレンとエンジェスで主を救出してください。私は全体の指揮をします。」

エンジェス「はい」

ファルクス「分かりました」

スーフェン「りょゝかい」

セレン「はゝい」

ヴィルシス「まってエンジェス…これを持って行きなさい」

と言って七色に変化する書を取り出しエンジェスに渡すと…

ヴィルシス「主にちゃんと渡してあげてね」

エンジエス「はい」

セレン「エンジエス、早く行こうよー!!」

エンジエス「…うん」

ファルクス「ヴァルスタレインズ04 炎将ファルクス…出撃!」

スーフェン「ヴァルスタレインズ05 水将スーフェン…行きます!」

エンジエス「ヴァルスタレインズ02…聖将エンジエス…出陣!」

セレン「ヴァルスタレインズ06 覇将セレンフィース…行ってきました!」

そう言くと4人の髪の色と同じ色をした羽が背中に生え…

ヴィルシス「頑張つてね、それと終わったら司令室に来て」

4人「はい!」

空高く飛び立っていった

ヴィルシス「早く司令室にいかなきゃ…」

ふと時計を見るともう11:30

予知能力が確かなら後2時間後に攻撃が始まる

ヴィルシス「主…どうか無事に帰ってきてください」

少女の戦いと友情の物語が今、始まります

「

## 第1章 第1話「七色の部隊」（後書き）

作「今回は主人公シャルスさんがゲストです」

パチパチパチパチ

シャルス「呼ばれたから来てみたんだけど…静かだね、ここ」

作「まだキャラがあまり出てないのであなたしか呼べないんですよ」

シャルス「でもヴィルシスさんがいるんじゃないの？」

作「あの人は今忙しいそうですから呼べないんですよ」

シャルス「そっかー…話が続かないね」

作「まあ二人以外誰もいませんから」

シャルス「…じゃあ暇だから次回予告しよっと」

作「はいこれ、原稿です」

シャルス「えっと……」

次回の蒼月の戦士たちは…

「ついに起きてしまった戦争」

「長く続いた平和の日々が爆音と火災によって音をたてて崩れていく」

「そしてついにシャルスの下にも砲撃が始まる」

「絶体絶命の状況に現れた3人の少女と男性」

「そして1冊の本…」

「すべてがそろった時、少女の人生は大きく変わる」

第2話「少女と1冊の書」

作「感想、ご意見等お待ちしてます」

シャルス「ではまた、次回をお楽しみに〜！」

## 第1章 第2話「少女と一冊の書」（前書き）

すみません！更新がかなり遅れてしまいました  
テスト期間であまり時間がなかったため  
書くのが遅れてしまいました…

受験生という身なので更新がたびたび遅れてしまつと思ひますが  
遅れてでも必ず更新しますので  
どうか見ていただけるとありがたい限りです。

「大切な親友…」

「私は夢のことを言つてしまつていいのかな？」

「言つてしまえば関係が崩れそうで」

「悩む少女はついに決断をする」

「第2話 少女と一冊の書… 始まります」

## 第1章 第2話「少女と一冊の書」

ヴァルスタレインズが出撃した少し前のこと…

シャルス side

昨日の夢は何だったんだろう？

いきなり女の人が出てきて戦争が起こるなんていつてたけど…

起こるわけないよね多分。あれは夢の中の話。

でも…ほんとに起きるのかな？

あの女の人の目は真剣だった。ひょっとしたら起きてしまうのかもしれない…

???「シャルス！おはよう」

シャルス「ふえ！？なんだ…鈴ちゃんか」

考え事してたらいきなり現れたこの子は

私と一番仲のいい友達の神咲<sup>かみさき</sup> 鈴ちゃん<sup>りん</sup>。

きれいな黒髪の子で黒色の透き通るような眼。

同じ3年1組で、昔から仲が良かった友達。

鈴「どうしたの？なんかすごく考え事してたみたいけど」

シャルス「えっ！いや…なんでもないよ」

鈴「そっか何か悩んでたらいつでも言ってよ。  
力になれるかもしれないから」

シャルス「うん……」

正直、いくら信頼してる鈴ちゃんにもこの話だけはとてもじゃないけど言えない。

いきなり今日戦争が起こるなんてこのレイントールでは考えられないことなんだから。

だから私は言わないことにした。

言ってしまったら今の関係が壊れてしまいそうで。

鈴「ほら、また真剣に何か考えてるよ。

ダメだよそんなにも一人で抱え込んだら

私はシャルスの言うこと信じてあげるから」

シャルス「…ホント？何を言っても？」

鈴「うん。どんなことでも私は信じるよ」

そこまで言うのなら…

シャルス「わかった…実はね…」

私は結局鈴ちゃんに言うことにした。

でも、言つてよかったのかもしれない。

鈴ちゃんは初めは驚いていたけどすぐに真剣に聞いてくれた。心配していたことにはならなくてすみそうね。

鈴「…なんで？どうしてそんな大切なことを

早く相談しなかったの？私たち友達じゃないの？」

シャルス「…言おうとも思ってたけど…」

鈴「関係が壊れそうだから。って言いたいよね？」

シャルス「うん…」

鈴「ハア…私はいつでも味方なんだから

もっと信頼してもいいのよ。」

シャルス「うん…わかった」

鈴「まあ今回は話の内容がかなり重要だけど…

その敵がどんなものかはわからないのよね？」

シャルス「うん。そのことは教えてもらえなかった」

鈴「それじゃどうしようもないわね。

ひとまず、普通に生活しよう。」

鈴（何か起きたら私にも秘策はあるんだし…）

シャルス「わかった。じゃあ早く行こう！

もう時間がないし…」

そう言つて携帯を見ると7時53分…あと2分で  
学校に行かなければ遅刻…

鈴「つてもう53分！？早くいくよ！」

シャルス「あつ！待って鈴ちゃん！！」

その後何とか学校に間に合つて給食を

いつもと同じように平和に食べてから  
昼休みに入ったときに異変は起きた。

突如大きな音がして、けたたましいサイレンの音が  
ミシエト市…いやレイントール全体に鳴り響いた。  
それと同時に先生が教室に入ってきて…

「早く教室を出て裏山に行きなさい！」

といった。この学校には裏に大きな山がある。

たしかにあの場所だったらほとんどの生徒が身を隠せるはず  
でも、私と鈴は逃げない。

なぜなら、こういう時はその場に初めはいた方が良い。

今行ったらパニック状態の生徒に押されて倒されて大ケガ…

それどころでは済まない可能性だってあるからね。

逃げていく間にも大きくなる爆音。

見れば遠くの方で火事が起きてるし…

「はやくしろー！！」

「きゃあ！押さないでよ！」

「知るか！さっさと逃げるぞ！」

「邪魔だ！」

やっぱり大混乱だね…

シャルス「タイミングずらして正解だったね」

鈴「まさかここまで被害が出るとは思わなかったけど…」

見ればいすや机はともかくガラスや掲示物…

その他いろいろなもの壊されていた。

シャルス「まあ…仕方がないよね。

それよりも早く逃げなくちゃ」

鈴「ええ…でも裏山はダメね。生徒以外に

一般市民もたくさんいる。」

シャルス「仕方ないか…私の家にしよう

何度も来てるから場所とかもわかってると思うし  
何よりも一番あの場所は狙われないから」

鈴「周りに家がないからね。

ひとまずあの場所だったらどうにかなるわね」

シャルス「じゃあ早く行こうか。

こうしてる間に近づいてるし…」

鈴「ええ」

たしかにさっきまで見えなかった敵の姿もあるわけだし…

……！？

シャルス「…ねえあれって…人だよね？」

シャルスはそう言って空に向けて指をさす

鈴「そんなわけが…」

すべて言い終わる前に言葉を失った

シャルスの言うとおり人が空を飛んでいる

しかも天使のような羽根を付けて…

そして、敵戦闘機にぶつかったかと思うと

戦闘機は爆発してその人は何事もなかったかのように  
次へと目標を変えて戦闘機を撃墜していく…

鈴「……！シャルス！早く逃げなきゃ

シャルスの家遠いでしょ！ほら、行くよ」

シャルス「ふえ！？えっ？あつ待ってよ」

そう言つて二人は走り出す。

いきなりの襲撃の中でも

この先に行けば少しでも

希望の光が見えると信じて…

## 第1章 第2話「少女と一冊の書」（後書き）

シャルス「で…どうしてこうなっちゃったのかなあ？」

作者「すみません」

シャルス「誤って済む問題じゃないよ？更新遅れ・予定まで届かない…」

作者「……」

シャルス「完璧にダメ作者だね」

作者「いや…こんな時にテストだったから…」

シャルス「問答無用！！遅れたのは遅れたんだから…」

作者「遅れたんだから？」

シャルス「1・私の出番を今後減らさないこと

2・定期的に更新すること

3・つまらない話は書かないこと」

作者「いじめですか？2以外不可能ですよ」

シャルス「あるえ？そんなことないと思うけど？」

作者「…鬼」

シャルス「何か言いましたか？」

作者「いいえ、別に何も言っておりませんよ？」

シャルス「そうなの？じゃあしつかりと守ってね？」

作者「はいはい（1は絶対守らないよ…）」

シャルス「1は絶対だよ？守らないなんて思っていないよね？」

作者「ハハハ…まさか？そんなこと思っていないよ」

シャルス「そうだね？もしも出番が少なくなったら…」

作者「…わかった！わかったからその物騒なものしませ  
俺を消す気か！？」

シャルス「流石にまだ使わないよ。本編で使ったら使えるけど」

作者「（…助かった）まあいいや。そろそろ終わろう」

シャルス「今回は盛り上がったなあ」

作者「（シャルスは怒らせるとどうなるかわかったし…）そうだね」

シャルス「ところで鈴は？」

作者「いるよ。ほら部屋の隅に」

鈴「やっと出れた…」

シャルス「さ…終わろう」

鈴「え？」

作者「そうだな、はい原稿」

鈴「二人とも？私は？」

シャルス「ついに始まった戦争」

「鈴とシャルスは誰もいない町を無我夢中に走る」

「その先に希望があると信じて」

「しかしシャルス達の元にも砲撃が始まる」

「そして訪れてしまう悲劇」

「鈴を襲う無数の爆弾…」

「逃げる暇なんてない。」

「そんな中、鈴はどうするのか」

「第3話　鈴の秘密」

鈴「いったい私ってなんだったの？」

作者・シャルス「あれ？いたんだ」

鈴「うわーん！もうこのコーナーに来ないっ！」

作者「…こんな人だっけ？」

シャルス「…さあ？」

シャルスが怒り、鈴のキャラが崩壊して終わる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4069o/>

---

魔法少女リリカルなのは～七色の戦士たち～

2011年10月8日02時36分発行